八雲立つ出雲の旅へ（『古事記』編纂一三〇〇年記念・万葉旅行）

――平成二十四年度 研修旅行報告――

神谷　碧

序　出雲へ

「八雲立つ」といえば「出雲」の枕詞である。出雲では古くから宍道湖などの湖が信仰の対象となっており、そこから立ち昇る白霧を、古代の人々は神秘的に捉えていた。湖に住まう神が、己の力を活性化させ、天に向かい白霧を立たせている、というのだ。「八雲立つ」とは、まさにそのような景色を表し、出雲の象徴として当時の歌に詠まれていたと考えられる。

二〇一二年九月十一日、私達は東海道新幹線で三時間かけ東京から岡山へ向かい、岡山から出雲を目指して特急列車・やくも号に乗り込んだ。そこからの道のりは平地の東海道と明らかに異なり、眼前に迫るように鬱蒼と草木が生い茂った山の景色が延々と続いていた。しかし、岡山駅から発車して何時間か過ぎた頃に、窓一面に湖が広がった。対岸が見えなかったので最初は海にも思えたが、白雲の下で波一つ立っていないのに違和感を覚えて地図を取り出してみたところ、ここが宍道湖だと分かった。偶然にも、私達は「八雲立つ」出雲の景色に出会えたのである。

一　出雲市にて

小雨の降る中、私達は出雲市駅に到着後、貸切バスに乗ってまずは出雲大社へ向かった。主祭神は大国主命であり、陰暦十月（神無月）には全国の神々が集まるという有名な神社である。大社造の本殿は日本最古の様式といわれ、国

宝に指定されているが、残念ながら遷宮の時期にあったため、今回は見ることは叶わなかった。ただ、隣接する古代出雲歴史博物館には、古代の本殿を模型にしたものが設置されていた。当時の本殿は巨木の柱が何本も連なっている上に建てられており、人々が天へと昇るようにその階段を上がっていく姿は、どれほど高度な文明が出雲に展開されていたかを象徴している。

また、古代出雲歴史博物館では、昭和五九年に荒神谷遺跡で出土した三五八本の銅剣の展示を見学した。銅剣は、弥生時代のはじめに大陸から伝わった青銅製の武器の一種である。日本では多く祭器として利用されていたと考えられるが、今までに発見された数は全国で百本前後だったということから、「三五八本」は驚くべき数字である。展示室の壁中に銅剣三百本がずらりと並べられている様は壮観で、私達は圧倒されてしまった。いずれも五〇㎝前後の中細型で、なかご部分に「×」印が刻まれており、このような印は荒神谷遺跡と隣在する加茂岩倉遺跡以外に例がないという。印の意味自体は未だ謎に包まれているが、祭器としての役割を終えて埋納されたという説が現在最も有力視されているようだ。

博物館の前では『古事記』編纂一三〇〇年を記念して、神話博しまねのイベントが行われていたが、そこの神話映像館で須佐之男命の物語を見た。話はかの有名な八岐大蛇退治で、序盤の話（高天原から追放されたところから、八岐大蛇退治を決意するところまで）は巨大なスクリーンに映像が流れているだけだったが、いざ八岐大蛇の首を取ろうというところで、須佐之男命に扮する役者が剣を携えて舞台に現れた。地元の伝統芸能を基にした剣舞を披露しつつ、映像の八岐大蛇と壮絶な戦闘を繰り広げた。二次元と三次元の表現を絶妙なバランスで活用した、非常に見応えのある作品となっていた。しかし、私達はここで一つの疑問を感じた。『古事記』において、八岐大蛇は酒で眠りに落ちた所、須佐之男命に首を全て切られて死に絶える。一方、神話映像館では、須佐之男命は酔わせることに失敗し、八岐大蛇との直接対決を強いられる。この差異は一体何なのか。

神話博しまねを後にしたバスの中で、池田先生は以下のように説明された。古代において、英雄とは『古事記』の須佐之男命のように知恵を働かし、たった一人で敵を討ち倒すものだった。しかし、大陸から渡来した儒教思想の浸透によりそのような英雄像は通じなくなっていた。後世の人々は、英雄とは相手が如何に外道であっても正々堂々と戦って勝利するものだとして、当時の英雄像に相応しく八岐大蛇退治伝説の内容を変えてしまったのである。現に、

須佐之男命が八岐大蛇と直接対決するという展開は、『古事記』などの文献には見られないが、神楽（神社で神をまつるために奏する歌舞）の演目には存在し、神話映像館のように勇猛果敢な須佐之男命の姿が描かれているという。

古典文学は、誕生してから今まで一つの形式・展開に縛られず、時代ごとの価値観に沿って変化していく可能性を持っているようだ。

さて、今までは出雲大社とその周辺を回ってきたが、ここからは時間をかけて出雲の沿岸部へとバスを走らせた。須佐之男命と天照大御神とを祀り日本の夜を守るとされる日御碕神社に向かうのが目的だが、その前に日御碕の灯台に立ち寄った。出雲大社周辺の町並みとは打って変わり、こちらは海の町といったところか。土産物の店がいくつも立ち並び、その場でイカやサザエを焼いて売りさばいていた。ただ、この時点で午後四時を回っていたため、どこも閉店直前の閑散とした空気をかもしていた。

日御碕の灯台は、この通りを抜けた先にあった。空も晴れて雲間からは日が差し、海からの波音も静かに響き、灯台から日本海を一望するには絶好の機会と言えた。しかし、私はここで不安を覚えた。灯台は、西洋絵画から飛び出してきたような美しい純白の石造りで、簡単に明治期の建物と推察出来た。つまり、エレベーターの設置が無いほど古い建物ということだ。そもそも、灯台にエレベーターなど設置されているのか。一階の受付には「日本一高い灯台」という謳い文句の紙が張られており、鉄筋の階段は人ひとり通るのがやっとで、薄ぼんやりと下が見える。這うようにして何百という段数を登った先に、何が見えたかといえば、私は知らない。灯台の階段を前に「怖い！」とは叫べず、泣く泣く頂上まで登ったのだが、あまりの高さに座り込んでしまい、景色を見るどころではなかったのだ。ただ、皆が揃ってカメラを手にはしゃいでいたのだから、灯台からの日本海は素晴らしい景色だったに違いないだろう。

この日最後に私達が訪れたのは、国引き神話と国譲り神話の舞台・稲佐の浜だ。国引き神話は『出雲国風土記』にあり、出雲の神・八束水臣津野命が網で対岸の土地を引き寄せて出雲国に結びつけたというもの。国譲り神話は『古事記』にあり、天照大御神が三度にわたって使者を派遣し、ここで大国主命に出雲国を譲るよう迫ったというもの。このように多くの神話が語られるだけあって、稲佐の浜は実に雰囲気のある場所だった。西には日本海が悠然と波を立てて広がり、東には草木の豊かな山が連なって霧がかっている。山や海を神そのものと捉えていた古代の人々が、こ

の景色を見て出雲を「神々の集う土地」と発想することは、決して難しいことではないと思った。いつの間にか空が灰色の雲に覆われて薄暗くなっていたのだが、その隙間から陽光が微かに漏れ出し、私も友人と、今にも神が一柱光臨しそうだと盛り上がっていた。

限られた時間の中で見学地を巡ったので、私達は「もっとじっくり見たい」という気持ちを抱えながら宿に向かった。宿自体は一般的なビジネスホテルだったが、さすがは温泉の宝庫・出雲である。ホテル近辺には評判の良い温泉宿があるという事で、懇親会の前に私は希望者を募って入りに行った。

出雲の温泉は、赤茶色だった。古代から出雲には多くの鉱山が存在しており、大量の赤鉄が温泉に混じっているためだ。八岐大蛇を出雲土着の神（製鉄従事者の奉祭神）と考える場合、腹部の「赤く爛れた」という表現はこの赤茶色の水を意味しているのではないかという。事前にこのような話を池田先生より伺っていた訳だが、私達は重要な事柄を理解していなかった。気分良く体を伸ばして温泉に浸かり、着替えも終わった頃に、使用済みのタオルを見てみると、悲鳴が上がった。真っ白かったはずのタオルは、いつの間にか赤茶色に染まっていたのだ。「大量の赤鉄が温泉に混じっている」とは、こういうことだ。私達はものの見事に全身赤鉄まみれになった（中には、これを予見して念入りにシャワーで洗った者もいたが、それでも落としきれなかったようだ）。

二　出雲市から松江市へ

真夏のような清々しい青空の下、二日目の私達は汗をかいて出雲から松江にかけての見学地を回った。最初は荒神谷遺跡だった。「遺跡」というよりは、芝生の広場や蓮花の池がある「公園」といったところで、付近の住民がバトミントンを楽しんだり、のんびりと池の周辺を散策していたりした。うだるような暑さの中にいたが、私達も殆ど散歩気分で、資料館、発掘跡地、復元住居を見ていった。ここから出土した青銅器の数々は、先に述べたように一日目の神話博しまねで鑑賞したが、資料館や発掘跡地でその発掘行程を写真と詳細な説明文によって知ることができる。遺跡から青銅器を発掘する作業員、破損した出土品を復元する職人、そこから当時の文化を考察する学者、あらゆる分野の人間が遺跡の研究に参加していたことが解った。未だ謎は多いが、今後どのような発見がなされるかも注目するところである。

出雲には玉造という地名がある。文字通り、古代から産業として玉（勾玉や腕輪などのアクセサリー）を作っている出雲の名所である。弥生から平安時代にかけて鉱山から瑪瑙（碧石）を採取しており、その加工技術は当時の日本で最も優れ、全国各地に出雲産の玉が流通していたという。このような産業は出雲以外にも各地方で展開されていたようだが、玉は主に弥生時代の権力者（男性）が好んで身につけていた物であり、そのような文化は奈良時代に入ると見られなくなり、出雲以外では玉の生産も無くなっていた。ではなぜ、出雲は平安時代まで続いていたのか。それは、天皇家の祭祀に必ず奉納されていたという玉の製造を、天皇より任せられていた一族・玉造部が出雲にいたからだと、出雲玉作史跡公園にある出雲玉作資料館館長の三宅先生が私達に説明して下さった。

東京とは異なり、島根は実に広々と土地を使うことが出来るようだ。玉作史跡公園も荒神谷遺跡と同様、広い敷地を持ち、充実した内容の資料館が設置されていた。瑪瑙を加工する際に用いた道具、勾玉や腕輪などの実物（瑪瑙）は勿論、『出雲国風土記』における「玉作」の記述など、文献資料も豊富に展示されてあった。

何より、三宅先生の説明が面白く、平安時代には貴族が玉作の職人を招いて瑪瑙の加工を実演させたという。それだけ出雲における玉作の技術が抜きん出ていたと言えるだろう。

しかし、現在の玉造では玉そのものよりも温泉が有名になっているようだ。玉造には、『出雲国風土記』『延喜式』に記述を残す由緒正しい神社がある。その名も、玉作湯神社。祭神は玉造部の祖神・櫛明玉神であり、元々は玉を作る神として祀られていたようだが、近・中世まで時代が下ると、玉作の守護神というよりはむしろ温泉の守護神として信仰を集めたらしく、近世にはもっぱら湯船大明神と呼ばれていたようだ。これが実によく出雲の玉造という土地を表している。玉作史跡公園から坂を下った所には温泉街が広がっていた。一日目の夜に温泉を楽しんだ者としては、ぜひとも玉造温泉にも浸かっていきたかったが、御昼休憩の一時間で実行するには不可能だったため、仕方なくバスで次の目的地へと向かった。（土産には勿論、瑪瑙の勾玉を買っていったが。）

加賀の潜戸（旧潜戸）、闇の深い洞窟の中に小石の積まれた山がいくつも並んでいる。そのような光景を知っているだろうか。親より先に死んだ子の霊が集まって親を慕い、石を積み上げて塔を作るという賽の河原伝説から、毎年子どもを失った親がここに仏花や玩具を供えていくという。

私達は遊覧船で加賀の潜戸を訪れた。四十人ほどの観光客と船主一人を乗せた船は、絶え間無く水飛沫を上げて颯爽と海を渡っていく。吹き付けてくる風は清々しく、私達を気持ち良くさせた。しかし、船を降りて加賀の潜戸（旧潜戸）に一度入ってみると、仏像がいくつも鎮座し、例の小石が積み上がった所などは酷く重々しい空気に包まれていた。私は背筋の凍る思いですぐに引き返してしまった。友人の中には、私と一緒になってこの場を後にした者がいたが、その子は霊感が強かったらしく、突然吐き気を覚え、仕舞には激しく泣き出してしまった。船に戻ってすぐに収まったが、今振り返ってみても、実に不気味な場所だった。潜戸の奥まで歩いた友人の話では、真新しいランドセルや片方しかない靴が生々しかったという。

ただ、私達の目的はこの旧潜戸ではなく、遊覧船が次に向かう新潜戸の方だった。陸寄りの旧潜戸に対して、海寄りの新潜戸は東・西・北の三つの入口から陽光を浴びて明るく、広大なトンネル型の海中洞窟であった。ここは遊覧船が自ら西から東へと抜けていくのだが、旧潜戸の憂鬱な気分を一瞬で打ち消すような感動を与えてくれた。ドーム状の天井が高く聳えて時に水滴を垂らし、澄んだ色の海面には潜戸内部が鏡のように写って見えた。このような美しい景色には神話が付き物で、『出雲国風土記』に記述されている。ここは佐太大神が誕生した地で、その際に母神・支佐加比売が金の弓矢を射通したことから洞門ができたといわれる。古くは加賀神社が鎮座する神域として信仰されており、旧社地を示す祠が設けられていた（新潜戸の入口付近に有り）。

神が誕生して祭られているという新潜戸、仏が子供の死霊を慰めているという旧潜戸、生と死、神と仏、奇妙な二面性を持つ海辺を巡った後は、佐太神社を参観して二日目の行程を終える。

三　松江市にて

最終日、私達は縁結びの神として須佐之男命と稲田姫命が祀られている八重垣神社を参拝した。「八重垣」とは、須佐之男命が八岐大蛇を退治する際、稲田姫命を隠すため大杉を中心に八重垣を造ったという伝承から来ており、境内の石碑には左記の歌が刻まれている。

八雲立つ　出雲八重垣　妻籠みに　八重垣作る　その八重垣を

須佐之男命はこの歌を詠んだ後、見事に八岐大蛇を倒して稲田姫と結婚する。ここから、出雲の縁結びの神として、また家庭円満、子孫繁栄、安産の神として、人々から崇敬

されることになったという。私達も心を込めて須佐之男命・稲田姫に祈りを捧げた。大学の四年間をぼんやり過ごしていると、なかなか御縁に恵まれないのが、女子大の悩みである。

その後、私達はいそいそと一枚百円の占用和紙を購入し、本殿の裏手にある鏡の池に向かった。ここは稲田姫命が日々の飲み水として、また姿を写す鏡としていたという伝承があり、良縁の訪れが早いか遅いかを占えるのだ。方法は簡単で、占用和紙に硬貨一枚（十円もしくは百円）を乗せ、それを池の水面に浮かべればいい。十五分以内に沈めば良縁が早く、三十分以上遅く沈めば良縁が遅れるというが、皆無事に十五分以内で沈んだようだ。

この日は専ら松江の神社巡りとなった。八重垣神社から始まり、神魂神社、熊野大社、揖夜神社を参拝した。神魂神社は、現存する最古の大社造り建物である。出雲大社と同様の造りで、古代の宮殿を元にしたものと考えられており、正方形の建物内部は古典的な日本家屋に近く、屋根の両端には千木という木板を交差させたものが設けられている。千木は、元々建物の補強の為にあったが、時代が進むにつれて装飾の意味を持ち始めた。神社の祭神の性別によって形が異なり、女性神（神魂神社）の場合は先端を水平に切られ、男性神（出雲大社）の場合は垂直に切られているという。しかし、「最古の建造物」という肩書があるだけに、神魂神社は人気のない山中にひっそりと建っており、塗装が殆ど剥げていて全体的に白んで見えた。ただ、周辺には青々と草木が茂っていたので、私達の目には趣深い景色に映っていた。

熊野大社は出雲国一之宮で、出雲国造の代替わりの際に行われる火継式の舞台となる場所である。旧国造が亡くなると、新国造は熊野大社の鑽火殿で燧杵と燧臼とを用いて神火をきり出し、その火で調理した食事を食べることにより出雲国造となる。これは、「火」と「霊（ひ）」が同一視され、火で調理したものを食べることで出雲国造の霊魂を体内に取り込むという意味合いからだという。熊野大社で毎年行われる鑽火祭は、火継式に倣って火をきり出す神事である。

揖夜神社は、近くに黄泉比良坂があり、黄泉国（死者の国）と関係の深い神社である。主祭神はやはり伊弉冉命である。『古事記』や『日本書紀』において黄泉比良坂は黄泉国と葦原中国（現世）を繋ぐ道のことで、伊弉諾命が亡妻（伊弉冉命）を求めて黄泉国へ行ったという話はよく知られており、境内の石碑には「神蹟黄泉比良坂伊賦夜伝説地」と刻まれていた。二日目の加賀の潜戸（旧潜戸）とい

い、また背筋の凍るような思いをする羽目になるのではと危惧したが、こちらはそんな事も無く、町中にある穏やかな神社であった。

こうして、私達は松江の神社巡りを終えて、最後に松江城に立ち寄った。出雲神話とは直接の関係はないものの、「松江まで来て古くから人々に親しまれている名所に行かなかったと言うのも、なんだから」という事である。九月十一日から十三日までの三日間、出雲市から松江市にかけて旅したわけだが、出雲は実に見所の多い土地で、まだ行きたい所もあった。私達は名残惜しく、松江城から出雲の景色を一望し、万葉旅行の締め括りとした。そして、また六時間かけて東京へと帰って行ったのである。

結

『古事記』編纂一三〇〇年記念に、なぜ出雲へ行くのかと思われる方もいるだろうが、こうして出雲の地を見て回った者から言わせると、確かに『古事記』が作られたのは中央の大和朝廷（奈良県）だが、『古事記』などの神話や伝承が今も息づいているのは出雲のように思える。大和朝廷もかつては日本独自の伝承や儀式を持っていたはずだが、奈良・平安時代にかけて大陸の政治・文化を取り入れるようになり、それらが消えていくだけでなく、街の風景自体も変容していった。建造物の大半が中国様式に習い、仏教の普及から寺院が建てられ、人々の習慣・思想も儒教によって支配されるようになった。その名残が今の奈良県や京都府にあり、まったくもって可笑しなことだが、奈良・京都は日本古来の文化とは少々離れてしまった部分もあるといえるかもしれない。

一方、出雲は『古事記』などの神話や伝承に多く登場し、今もその名残がある。それは大和朝廷が無視出来ないほどの強大な勢力が古代にあったためだと考えられている。その勢力によって、多くの神社が出雲に建てられ、現在に至るまで神々への信仰が続いているのである。

（かみや　みどり・実践女子大学文学部平成二十四年度三年生）

加賀の潜戸

八重垣神社